

## 2. レビー小体型認知症の介護の基本

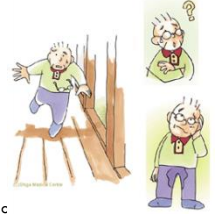


レビー小体型認知症は、アルツハイマー型認知症以上に周囲の人の対応や介護、治療薬により症状や経過が大きく変わります。レビー小体型認知症の方への対応には

**「適切な薬物治療」**

**「経過にそった適切な介護」**

**「転倒の予防」の3つのポイント**があります。日頃からその症状に合わせた対応がとても大切です。



### 適切な薬物治療

レビー小体型認知症では、頭の中で情報を伝えているアセチルコリンという物質が、アルツハイマー型認知症以上に少なくなっていることが知られています。そのため、アセチルコリンを働かせる作用のあるお薬は、レビー小体型認知症に、より効果的であると考えられています。

レビー小体型認知症の薬物治療では、

1. 注意障害・視覚認知障害などの認知機能障害に対する薬
2. 幻視や妄想などの精神症状に対する薬
3. パーキンソン症状に対する薬

の3種類が必要に応じて使われています。



**注意: お薬の過敏性には注意しましょう!**

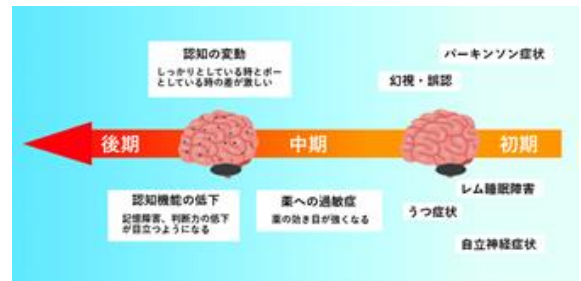
レビー小体型認知症の人は、お薬に敏感に反応することが知られており、さまざまな副作用があらわれ、通常の服薬量でもお薬が効きすぎたり、症状が悪化したりすることがあります。市販の風邪薬や胃腸薬で具合が悪くなることもあります。※副作用については、担当の医師にお問合せください。

### 経過に沿った適切な介護

レビー小体型認知症の人の多くに、実際にはないものが見えたり(幻視)睡眠中の大声の寝言、また、歩行や動作に支障がでるなど、アルツハイマー型認知症ではあまりみられない症状があらわれます。

また初期にはアルツハイマー型認知症で多くみられる、もの忘れなどの記憶障害は目立ちません。

レビー小体型認知症ではいろいろな症状があらわれるほか、経過にともない目立つ症状が変わってきます。ご本人の症状をよく観察し、症状に合わせた対応が重要です。



### 転倒の予防

レビー小体型認知症では、パーキンソン症状という、身体の筋肉や関節が固くなり、思うように動かなくなる症状があらわれます。動作もゆっくりとなり、小股やすり足で歩くため何もない場所でもつまずきやすくなります。

また、姿勢を保ったり、立て直したりする反射機能もおとろえるため、**少しの接触が転倒**につながります。

さらに、頭がはっきりしているときとそうでないときの状態の変化にともなって

**注意力や集中力が低下**するために、より転倒の危険性が大きくなります。

レビー小体型認知症の人はアルツハイマー型認知症の人に比べ、

**約10倍転びやすい**といわれています。

転倒による骨折がきっかけで、寝たきりになることもあるため、日頃から転倒への注意が大切です。



※参考資料: 監修: 小阪憲司先生「レビー小体型認知症介護ガイドブック」から抜粋させていただきました。

※次回は「3. レビー小体型認知症に見られる症状と適切な対応」